

灰色の虹—haiiro
rainbow—

しりこん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

色の認識できない少年と、健気な少女の、切ない恋のすれ違い。

目次

後編 前編

--	--

21 1

前編

*

神経を集中する。ただ目の前のことに打ち込む。視界に入るものを絞り、余計な情報をカットする。眼前に拡がる白と黒の世界。そこに、鼻につく消毒液の匂いや赤ん坊の泣き声は必要ない。その若者は静かに待った。

パチリ

対面する老人が石を置く。なるほど、定石だ。

パチリ

若い方も無難に定石で返す。その後もお互いに一步も退かない攻防を繰り返した。盤面が白黒で埋まってゆく。そろそろ勝負がつくだろうか。

「灰かいさーん、淡墨あわすみ 灰かいさーん。診察室にお入りくださいーい」

その若者——灰がゆつくりと立ち上がる。老人に決着はまた次回、というと、老人はにこやかに親指を立てた。無い歯が光って見える。灰は簡単に片付けて診察室へ向かった。

中へはいると、担当の医師が待っていた。

「やあ灰くん、元気にしてるかい？」

「ええ、まあ……………とくに変わったこともないです」

ふむ、と医師はカルテにメモをしていく。

「じゃあ少し診せてもらおうね」

そう言つてペンライトを取りだし、灰の目を片方ずつ見ていく。

「変化は無さそうだね……………」

再びカルテに書き込む。今時紙媒体とは珍しいな、と灰は思った。ちらとカルテを覗き込んでみるが、灰には読み取ることができなかつた。あれはドイツ語だろうか？

「よし、ありがとう。今日の定期検診はこれで終わりかな。ああ、待つて。少し話したいことがあるんだ」

終わりだ、と思い立ち上がろうとしていた灰を、医師は留めた。灰は不安を覚える。

「灰くんは今何歳だっけ？」

「……………十七歳です」

手元のカルテに書いてあるであろう質問をあえて投げ掛けられた。医師の意図を隠れずに、灰は困惑する。その姿を見て灰の気持ちを察したのか、医師は言葉を続けた。「ごめんごめん、変なこと聞いちゃったね。ただ、もうそんなに大きくなつたのかと思つてね。じゃあ、もうひとつ、質問いいかな」

うなずく灰を見て、医師は続けた。

「灰くん……君、手術を受けてみないかい？」

手術。

その言葉に灰は目を見開く。自分が手術……。今まで考えたこともなかった可能性に、頭が追い付けないでいた。

灰は物心ついたときから色が認識できない体質であった。一般の人間がみている世界が、灰にはすべてモノクロに見えるという。その事実が気がついたのは、小学校の美術の授業で同級生に指摘されたことが最初だった。医師曰く灰の症状は珍しいため、研究させてくれ、と頼まれていたのだ。

そんなわけで、幼い頃から世話になっている医師に、いきなり手術を持ち出された。……なぜ今ごろになってだろうか？

「灰くんの成長は今、円熟期を迎えつつあるんだ。肉体的にも、精神的にも、ね。君のよくな場合だと、成長中に手術を行うのはリスクが大きいんだ。だから今まで手術を提案しなかった」

医師は、もし灰が積極的に直したいと言ってきたら適齢期まで待つように説得するつもりだったようだが、灰は他人と同じ世界を視たいと言ったことはなかった。

「ただ、二つほど問題もあってね」

医師は重い口調で続ける。

「さつきリスクの話をしたけど、成長したからといって零%になるわけではないんだ。つまり」

「失敗することもある、てことですか」

「……………そういうことになるね。医師の腕に依らず、どうも個人の体質の問題らしい。なにせまだ発展途上だからね、わからないことも多い。今わかっているのは『どうすれば直せるのか』ということくらいなんだ」

目が見えなくなる……………灰にとってそれは、絶望である。自分と感性の合わない人間の手を借りなくては生きていけないなんて……………。

「そしてもうひとつは、まあ、これも精神的なものではあるんだけど……………」

そういつて医師は言葉を詰まらせた。どう伝えるべきか言葉を選んでいるようだ。

「この手術は神経とかに手を加える方法を採用んだけど、手術したあとすぐには強い刺激を与えてはいけないんだ。神経や脳を傷つけることになるからね。だから手術痕が完全に治るまで、目のまわりを包帯で巻かせてもらう」

この意味がわかるかい、という医師の問いに、灰は首を横に振る。

「手術痕が完治するのには、個人差はあるけど、約一ヶ月くらいだと予想される。そのあいだ、もう何も視ることができないかもしれない、という恐怖と闘わなければいけなく

なる」

それは、想像するよりもきつと辛いことであろう。もともと灰は恐いものから逃げがちな性質であった。しかし手術をしてしまえば逃げることは叶わないだろう。灰は襲い来る不安に抗う材料を持っていない。

「……までのことを踏まえて、決断は君にまかせる。僕に君の未来を決める権利は無いからね。もちろん受けてくれれば、医学の進歩、という意味で僕は嬉しいんだけどね」
そういえばTVなどで彼の名前を見たことがあつたな、と灰は思った。藤堂とうどう
孝幸たかゆき、この医師の名前だ。けっこう有名な医師らしいことを、灰は覚えている。ならば、腕も相当なはずだ。

しかし彼は、医師の技量は関係なく失敗する可能性がある、と言った。

「俺、は……………」

思考を回転させる。だが、ずっと同じところだ。意見が堂々巡りを繰り返り広げている。

「まあ、直ぐに答えを出さなくてもいいよ。ゆっくり考えてくれてからでもいいから」
医師はそう告げ、その日の診察は終わった。一礼して診察室を出る。先ほど囲碁を打った老人はさすがにもう帰ってしまった。

灰は会計——といつても金は払わなくもよかつたが——を済ませ、本棟をでる。

*

エントランスには多くの人が交錯している。さすが総合大病院だ、と感心する。灰は人の間を縫うようにして進んでいった。……と、誰かとぶつかってしまった。灰も相手も避けきれなかったようだ。相手は灰と同じくらいの年頃の少女だった。

「つと、ごめんなさい。大丈夫ですか?」

後ろによろめいた少女をすんでのところで手をつかんだ灰は、少女に謝る。しかし、少女の口から出たことばは、感謝でも謝罪でも、ましてや怒りでもない、灰の予想に反した言葉だった。

「あれれ……………灰くん?」

「えつと……………はい、灰ですが」

灰は見覚えのない少女に急に名前を呼ばれ、困惑する。

「やっぱり灰くんだ! 久しぶりだあ。その様子だと私のこと、覚えてない感じかな?」

どうやら彼女は昔、灰と知り合っていたようだった。

「んーとね、じゃあ私の名前。朝比奈あさひな 菜乃花なのかって聞いても思い出せない?」

灰は必死に脳内検索をかけるも、思い当たるものはない。少し申し訳なさそうに灰は菜乃花に聞いたです。

「すみません、いつごろ出会ったんでしたっけ」

「そうだね……………小学4年生くらいから一緒にいたかな。中学上がるときに私は引越
しちやったから……………出会ったのは7年くらい前になるのかな」

小学校……………灰にとつては嫌な記憶の方が多く、あまり良く覚えていなかった。確か
いじめっこに対して積極的に注意していた子が居たような、と、当時の面影がうつすら
と灰の頭に浮かぶ。だが、その程度だ。

「そっか……………思い出せないか。でもまあ、また今から友達になればいいよね！そうだ、
連絡先交換しようよ！」

菜乃花は素早く切り替えて、ポジティブに考えだした。灰はとくに断る理由はなかつ
たので、連絡先を交換した。

その後も菜乃花と灰は雑談をしていた。妙に懐かしい感じがするのは、やはり過去に
灰と関わりがあつたということだろう。

「あ、時間が！灰くん、またね！」

灰にしては珍しく他人と楽しく話をしていたが、菜乃花が病院にいる理由を失念し、
長い間引き留めてしまった。彼女も何かの用事で病院に来ていたのだ。灰はぎこちな
く早歩きをする菜乃花を尻目に病院を後にした。

*

灰の家……もとい部屋は、病棟とは違う、寮のようなところにある。高校は大学院の付属高校で、これもまた病院の敷地内にある。そのすべては、あの医師、藤堂に与えられたものであった。院長である彼は、研究対象である灰への報酬として一般的な生活と大学入学までのエスカレーターを用意してくれている。もちろん光熱費や食費もだ。そういうこともあり、灰は藤堂の頼みを断りづらく感じている。しかし……。

（目が見えなくなるのはなあ）

別に見えなくなると決まったわけではない。しかし、なった場合のことを考えるとこのままの方が幾分かマシであろう。なによりメリツトを感じられない。今まで色が見えなくても生きてこれた。突然色が見えるようになったところで何になるというのか。

と、灰はずっとこんなことを考えていた。藤堂はこうとも言っていた。「灰くんには色が見えるようになって、ぜひ自分の視野を広げてほしいと僕は思っているんだ」と。灰はなにも変わらないんじゃないかと考えているのだが、何か変わるのだろうか。

灰は思考に息詰まり、明日の授業の予習を早々に切り上げ布団に寝ころがる。夕方ながらにうつらうつらしていると、灰の部屋を訪ねる者が一人、インターホンを鳴らす。覗き穴を覗くと、見知った影がそこにあつた。

「よつす、灰。元気にしてたか？」

それは灰の友人の、赤池湊あかいけみなとだった。高校に入ってから仲良くなったクラスメイトで、

他人と合わない性質の灰でも分け隔て無く接している。

「なんだ、湊じゃないか」

突然の訪問者に灰は驚く。学校以外ではあまり会わないのはもちろん、灰の自宅をなぜか知っていることに。ふと手にしている紙袋に目を落とすと、理由がわかった。

「ああ、これな。学校で配られたプリントとか手紙な」

おそらくこの場所も学校から聞いたのだろう。

「しっかし、いいよな。学校と家がこんなに近くてさ。うらやましいぜ」

使命を果たしたはずの湊はしかし、すぐには帰ろうとせず、灰の部屋を眺めはじめる。灰も拒まず中へとひき入れた。

灰が急な客人にとりあえずのインスタントコーヒーを用意している間、湊はベッドの下やタンスの裏などをまさぐっていたらしいが、なにも見つからずに残念そうにしていた。部屋でくつろぐ湊を横目に、コーヒーをすすする。

雑談をしながらしばらくしていると、湊が鞆からカサカサと何かを取り出す。

「灰もいるか？アメちゃん」

「おう、ありがとう」

灰はありがたくもらおうと手を伸ばす。が、湊からの甘い贈り物はなかなか届けられない。湊の方をみると、灰の目には湊が何か迷っているように映る。手にする袋には

『カラフルあめだま』とある。

「どうした？」

「いやな、灰にどの色のアメをやるうかと思つて」

存外しようもないことに、灰は嘆息した。色の見えない灰にとつてはどうでもいいことのように感ぜられた。

「なんでもいいんだけどなあ……せつかくだし、お前の好きな色つてのをくれよ」

「あいよ。ホレ、何色が当ててみな」

灰の手に転がる黒っぽいアメ。一般人から見ればそれは赤なのだが、灰にはわからない。湊を見るといたずらっぽく笑っている。

「湊、お前、わかつてやるのやめてくれよ……」

当てずっぽうで答えて間違えるのも癪だった灰は、呆れた感じで湊にそう返した。

「ハハハ、ごめんごめん。それは赤色、イチゴ味だ」

灰はアメの正体がわかり、安心して口に放り込む……かと思いきや、灰はそのアメをいぶかしげに眺めたまま動かない。

「喰わないのか？イチゴ味苦手だっけ？」

「いや、そういう訳じゃないんだが」

色の話のせいで、灰の脳裏には先日の医師の話、手術のことがちらついていた。アメ

を手の内で転がし、考える。

「なあ、赤色つてどんな色だ？」

「珍しいな、そんなことを聞いてくるなんて」

灰は今までそういつた類いの話を他人とすることを避けていた。だが、見えるかもしれないと、そう思うと、灰の知的好奇心はゆつくりと動き始めていた。

「しつかし、どんな色、ねえ……。赤は赤、としか言えねえだろ」

一つ灰が誤ったこと、それは相手が湊だったことだ。湊は昔から、(時おり鋭いことばを口にするが)基本的に感覚的な人間だと聞いている。だからこそ灰ともそこまで軋轢無く接することができるのだろうが、こういつたことを聞くにあたっては不向きな人間だ。

「はあ、まあいいや」

灰はあきらめ、好奇心を頭の外へ追いやることにした。

湊はコーヒーを飲み終えたころ、帰っていった。灰は湊が帰るまでアメ玉を眺めていたが、やがて口に含んだ。

「ん、甘い」

聞いた話によると、色によって味覚は大きく左右されるらしい。湊に出してやったコーヒーもこのアメ玉も同じ色に見える灰では、その事を理解することができない。た

だ、確実に理解できることがあるとすればそれは

「湊のやつ、アメ舐めながらコーヒー飲んでたのかよ」

湊の味覚がおかしいということだろうか。

*

菜乃花と灰が病院で会ってから一ヶ月程過ぎたある休日、菜乃花は病院の敷地内の公園で灰を待っていた。彼とはこの一ヶ月の間もちよこちよこメツセージを交換しており、彼らの仲も大分深まってきていた。

ベンチに腰かける。先日までの残暑も過ぎ去り、過ごしやすい季節となってきた。公園では小さな子供たちが元気に走り回っている。菜乃花は膝に置いた手をぎゅつと握りしめる。時計を確認すると、待ち合わせまでまだ十五分はある。さすがに早すぎたか、とかぼんの中のものを取り出そうとしたところ、こちらに向かってきている灰の姿が目に入った。

「おーいー!」

手を振る菜乃花に応えて灰も手を挙げる。その顔は、何か思い悩んでいるようにも見える。

「悪いな、相談したいことがある、なんて言っちゃって」

灰は、菜乃花に相談を持ちかけていた。メツセージでもできる話ではあったのだが、

菜乃花からの”直接会って話したい”との申し出を受け入れ公園で待ち合わせたのだった。

「いいよ、いいよ。私も会いたかったし」

わざわざ直接会いに、集合時間よりだいぶ早く公園で待っている様子を見るに、相談事を迷惑には思っていないのだろう。

「それで、ざっとしか聞いてないんだけど……手術を受けるか迷ってるんだっけ？」
「うん、そうなんだよ」

灰は、医師に手術をすすめられたこと、リスクについて、受けるメリットが感じられないことなど、懇切丁寧に話した。菜乃花は一生懸命にメモをとってくれている。

一通り話終え、菜乃花に意見を問う。

「うーん、これは……最終的には灰くんが決めること、決めなきゃいけないことだと、私は思う。ただ、私個人の意見としては、灰くんには色が見えるようになって欲しい……かな」

「どうしてだ？」

「どうしてって……灰くんは覚えてないと思うけど、小学校のころ、授業の終わりにすっごく綺麗に虹が出たことがあってさ」

菜乃花曰く、当時の灰は「空のところがぐにやっとなってるのを見て、何でみんな楽

しそうなかわからない。みんなと同じものが見てみたい」と言っていたらしい。

「だから……他のみんなが窓際に集まつてる中、灰くんだけ一人淋しそうにしてたのがかわいそうだったから……かな」

「でも、今は別に虹が見たいなんて思っていないし、見えたところでそれをみんなと同じようにキレイだと思えるかどうかなんて、そんなのわかんないよ」

自分から相談を持ちかけておいて否定的なことばかり口にする灰を見て、菜乃花はどう思うのだろうか、灰は気づいていない。それどころか、応援が欲しいのか手術をしない理由が欲しいのかも、灰にはわかっていなかった。

しかし菜乃花は——殊に他人とのつきあい方に関しては、とても優秀な人間であった。

「そんなことだろうとあって、私は秘策を用意しちゃってます！」

そういつて彼女は一冊のノートを取り出した。灰は、どうぞと手渡されたそれを開く。中には一頁につき三つ程のいろいろな「濃さ」の丸と、その丸の色に関する説明が、とても細やかに書かれていた。文章には推敲の痕であろう、消ゴムの影が残っている。言葉遣いの節々からも、彼女の優しさが感じられる。

「これって……」

「私のオリジナル色辞典です！灰くんにも色に興味を持ってもらうのが、私の今日の目標

です」

菜乃花はノートを灰と共に見るべく、肩身を寄せる。ふわりと香る柑橘系の匂いに、灰の息が詰まった。だが菜乃花はお構い無しといったように色の説明をしようとする。「色の順番は紫から赤の、虹の順番にしてあつて、それぞれの元の色をおおざっぱに彩度、明度別にして並べてあるんだけど……、それは、見えるようになってからでもいいかな」

一頁目には、灰にも解りやすいように彩度、明度について説明が為されている。が、それでも色を知らない者にとっては飲み込むのに時間がかかる。灰は表面上の言葉だけは理解し、次の頁へ進む。

「せっかくだし、いくつかピックアップして紹介するね。まずは青色かな」

菜乃花は青の項目の頁を開く。『青』というだけでも相当な種類が存在するということが、灰にも理解できる。

「青は、静かで落ち着いた気持ちになれるような、そんな色かな。涼しいとか寒いっていうのも青系の色から感じられるイメージなんだよ」

「じゃあこれは？」

「この白みがかった青色は水色って言って、氷とかの冷たいもののイメージがあるよ。ソーダ味のお菓子とかも、この色で彩られていることが多いね」

「なるほど……………」

というような感じで、菜乃花の説明はテンポよく進んでいった。

緑系の色、黄系の色と進んで行き、最後に赤系の色の説明に入った。

「赤は、なんと言っても、こう……………暑く燃え上がるような？そんなイメージかな。例えば炎だったり、あとは……………」

「血の色」

ボソツとほんの小さい声で灰が口走った。いや、灰の口からこぼれ落ちた。この発言に驚いたのは、菜乃花ではない。灰自信が最も驚いていた。

妙な間が、二人の間に流れる。そう感じたのは、灰だけだったかもしれない。何秒も経ってから、菜乃花が話し出す。灰にはそう感じた。

「……………そう！よく知ってたね？こんな情熱的な色が身体中を駆け巡っているなんて、生き物ってなんて素敵なんだろうって私は思うな」

菜乃花の言葉は灰には届かなかった。灰は先程から停止したままだ。灰の顎を変に粘ついた汗が流れ落ちた。

「俺はなんで血が赤いなんて知ってるんだ？」

「んー、昔に湊くんに聞いたとか？」

小さく呟いた灰の自分に向けた言葉に、菜乃花はそう答えた。菜乃花は灰の様子に気

が付いていないのだろうか？

「……………あつ」

菜乃花は何かに気付き、様子がおかしい灰を見て安堵した。そして同時に灰の異変にも気が付く。

「灰くん、大丈夫？目がすごい痙攣してるけど……………」

菜乃花の呼び掛けに、灰はようやくやくハツとなつた。

「あ、ああ。すまん。少しぼうつとしてた」

あわてて取り繕い、ノートをペラペラとめくる。赤の項目にぎつと目を通す。

「そ、そういえば、菜乃花はどの色が好きなんだ？」

「えつとね、私が好きなのは、これ！」

菜乃花はノートのその頁を開き、指差す。それは黄の頁のある一色だった。

「これはね、『菜の花色』って言われてる色で、私の名前でもある菜の花の色なんだよ！

『菜種色』とも言っただけだね。私の色！」

楽しそうに笑う菜乃花は、先程までの灰の動揺を吹き飛ばした。灰は、目の前の愛らしい女性がどのような色なのか、知りたいと思った。自分のためでなく、彼女と並んで色のある景色を、世界を、見たいと思っていた。

「どうかな、興味持ってくれた？」

「ああ、本当にありがとう。これ、もらってもいい？」

「もちろん！だって灰くんのために描いてきたんだもん！」

その言葉を聞き、灰はノートを大事そうに抱えた。菜乃花を腕のなかに感じた。手術の意味が、光が、灰の未来を臍気に照らした、そんな気分だった。

「なあ、菜乃花。色を見られるようになったらなんだけどさ」

「？」

「色が見られるようになったら、二人で、いろんな世界を見に行きたいんだ。一緒に。どう……かな」

「う、うん！よろこんで!!」

菜乃花は、とてつもなく明るい、不自然なほど明るい笑顔で、そう答えた。

「今日は本当にありがとう。今からの予定は、何かあるのか？」

「いや、そろそろお母さんが迎えにくる時間だから、車で帰る予定だよ」

「そうか、じゃあ、また今度な」

「うん！」

こうして彼らは別れた。菜乃花は灰と別れたあとも、動こうとしなかった。しばらくして、彼女の後ろに誰かが立つ。菜乃花はそれが誰だか、見なくても解った。

「よう、人生のやりたいこと、全部できたか？」

「……………なにしに来たの？」

「おいおい、かの吉良吉影の言葉を知らないのか？」

「……………ええ、できた。もう私のやりたいことはすべて終わりました」

「そうか、よかつたな」

彼は終始へらへらとした態度をとり続けた。菜乃花は彼のそういつた態度、そしてデリカシーのない物言いがひどく嫌いであつた。

「きつと灰は、手術を受けるぜ。ありや漢の目だ。今頃帰つてお前のことオカズにでもしてるはずだぜ」

刹那、菜乃花の拳が彼に向かつた。しかし、彼女の拳は空を切る。……………届かない。

「おっと、怒らせちまつたか。だがお前も灰のこと好きなんだろう？ だつたらいいじゃねえか」

「彼はそんな人じゃ……………ない」

どうだかねえ、と鼻で笑うように、彼は言った。

「じゃあさよならな、灰によく言つといてくれ」

彼は手をヒラヒラとさせて帰つていった。結局彼は何がしたかつたのか。ただ、その読めない考えの上で転がされていることは、菜乃花にはなんとなくわかつていた。自分がしたいことをしている筈なのに。

「さ、私も帰りましょう」

そういって、菜乃花はゆっくり、ゆっくりと帰っていった。

後編

「じゃあ、手術の日程が決まったら、一報入れるよ」

「ありがとうございます」

次の定期検診の日、灰は医師に決意を伝えた。急な心変わりだったにも関わらず、医師は迅速な対応を見せ、手術は一週間後に決まった。学校へは休学届を出し、連絡をとっている菜乃花や湊には、しばらく電話での連絡をお願いした。

手術のための準備で、一週間は一瞬で溶けた。その間、菜乃花からは応援のメッセージが送られてきた。しかし湊からは、ついに反応はなかった。

手術は滞りなく進んだ。灰は全身麻酔で眠らされ、気が付いたときにはどこかに横たわっていた。視界は真つ暗で光の一筋も見えない。ただ黒く、静かな空間が広がっている。手術の前は無理やり押しつぶしていた恐怖心が、今更ながら灰を襲った。静寂が耳に刺さる。吐息の音がやけにうるさい。包帯できつく巻かれているためわからないが、きつと泣いているのだろう。涙腺にぶい痛みが走るのを感じた。

どれだけ経っただろう。ガラリとドアが開いた。

「やあ、灰くん。お目覚めかな」

「いったい、どうなったんですか？手術は……手術は成功したんですか？」

取り乱して、やってきた男……医師の藤堂に縫り付こうとして。灰は虚空をつかむ。

「失敗はしなかったよ。あとは君の運次第……といったところかな」

医師は、よくある『根拠のない励まし』はしなかった。灰にとってそれが無意味だと知っていたのかもしれない。灰も自分の欲しい回答を聞けて、冷静になることができた。

「落ち着いたかい？あまり大きな声をだすと、隣の部屋の人が起きてしまうから」

静かにね、と医師は灰の耳元でささやいた。落ち着きを取り戻した灰は少しそれが……気味悪く感じた。

「今は夜だから、もう少しお休み」

さつきまで寝ていたので眠気を感じていなかったのだが、安心感を覚えたからだろう。灰は再びベッドに横になる。甘い香りに包まれて、灰は朝まで眠りに就いた。

*

太陽光の温もりを感じる。うめき声を漏らして、ベッドから上体を起こす。暖かな紫外線と頬をなでる風が心地よい。目を閉ざされているのに目覚めが良いとは、皮肉なものだな、と灰は独りごちる。

「なに独り言言ってるの?」

「へひあつ!」

独り言を誰かに聞かれたときほど、恥ずかしいものはない。それが意中の相手であったのなら、なおさら……………

「おはよつ、灰くん!」

「おま、菜乃花か!」

なぜか菜乃花が、灰の病室に居る。気取って口にした言葉を、誰に聞かれることもないと思っていた台詞を、よりにもよって、菜乃花に。

「はい、リンゴ剥いてあげたから、口開けて。ほら」

まだ恥ずかしさに悶えている灰の顔に菜乃花の手が近づいてくるのを感じる。唇で受け取った林檎は、火照った頬のおかげかひんやりと感じられた。しっかりと、菜乃花の優しさと林檎を噛み締めてから、ようやく疑問が灰の口を衝いた。

「なんで菜乃花がここに?」

「なんでって、私が来たかったから?」

「お、おう……………変な奴だな、菜乃花って」

苦笑する灰に、菜乃花は頬を膨らます。本当は嬉しいはずだが、思春期の男子にそれを表現する術は無かった。

「そんなこと言うんだったら、もう来ないでおこうかなー」

「ごめんごめん、来てくれてありがとう」

感謝の言葉を聞き、菜乃花は得意気に鼻を鳴らす。

「それで、さっきの独り言はなんだったの？」

「忘れてくれ、あれは……思春期特有のアレだ」

灰は甦つてきた恥ずかしさを振り払い、残りの林檎を受けとる。飲み込むと、菜乃花がすぐに次の欠片を灰の口元へ持つていく。幸せな空間が、病室を満たしていた。

「じゃあ私、そろそろ帰るねー」

しばらく……時間を忘れるほど灰と菜乃花は話し込んでいた。今何時か、灰にはわからなかったが、そろそろ昼飯時だろうか。

「おう、じゃあな」

灰の挨拶に、帰ってくる声はなかった。菜乃花の足音は聞こえなかったが、もう帰ってしまったようだった。

廊下とおぼしきところからカツカツと足音が響いてくる。

「灰さーん、夕食の時間ですよ」

*

菜乃花はそれから毎日、病室にやってきた。灰にとってそれは唯一の楽しみであつ

た。何をする訳ではない。他愛もない日常のこと、未来のこと、この間読んだ本の世界のこと。彼女と話をしているだけで不安や現実から目を背けることができた。

そんな生活をしていた、ある日のこと。灰はいつも寝ているであろう時間になっても、眠れなかった。大したことではない。目の辺りがとてつもなく痒かった。

「誰もいません……よね？」

瞼の上から搔きただけだから、と目の包帯に手をかける。医師から触るなど言われていたが、このままでは寝付けないと灰は判断した。そつと包帯をほどく。巻き直しやすいように、ほどこいた端からきれいにたたんでゆく。結構な長さをほどこいたところで、目が露出した。灰はそつと瞼を搔く。

ふと、魔が差した。少し、少しだけでいいから、この部屋だけでもどうなっているのか見てみたい。好奇心は、灰には止められなかった。

少しずつ、少しずつ。

視神経を刺すような痛みが灰にちよつかいを出す。

少しずつ、少しずつ……

しかし、どこまで目を開いても、黒塗りの画面は変わることはなかった。全く、光のない世界が広がっていた。

「っー」

痛みが瞼を無理やり閉じた。目の奥が痛い。今見たものは真か、それはわからない。失敗したんじゃないか、その恐怖感が灰を満たした。いままで見ていた、魅せられていた希望は、手の届かないところにあつた。そう思うと、菜乃花に申し訳なく思えてきてしまった。いや、遅かれ早かれ結果は変わらなかつたのかもしれない。

「——っあ——!!」

言葉にならない声を布団で噛み殺し、出ているかもわからない涙を流し、包帯を巻き直した。これが夢であつたら、なんて思いながら、灰は無理やり眠りに就いた。

*

菜乃花は今日も明るい。いつものように元気な声を灰に届ける。しかし、灰はとても明るい気分にはなれなかつた。数日前のあの出来事……鮮明過ぎるほどに覚えていく。

「それでね——ん、灰くん大丈夫？なんか元気ないけど……」

「あ、ああ。最近うまく寝付けなくて」

数日前の出来事……灰は鮮明過ぎるほどに覚えていた。どこまでも続く暗闇。神経の焼けるような痛み。

「そうなの？わかつた、先生に言っておくね」

医師に言つてなにか変わるものなのか、灰は疑問に思った。が、自分で話せばあの事

がバレてしまいそうだったので、素直に頼む。

「たのんだ」

「まっかせて！大丈夫、なにがあっても私が全力でサポートするから!!」

「ほんとに、ありがとな」

やはり、菜乃花は人を元気にする力がある。何気ない会話で灰の沈んでいる気持ちを引き上げる。灰は手を差し出して、握手しようとした。それを見て、菜乃花も手をさし出す。

カラランッ

乾いた音が部屋中に響いた。

「なんか倒れた？」

「ああつ。私のだ。ちよつと……んしょ、待つてて……」

菜乃花は足元に落としたそれを、座り込んで拾おうとする。もちろん灰には見えていないが、立ち上がる際、菜乃花はひどく衰弱しているように見えた。

「ふうつ、ごめんね。」

思いの外時間がかかっていたため、二人とも握手のことは忘れてしまった。菜乃花がおもむろに立ち上がる。

「じゃあ、今日は帰るね。また明日」

「じゃあな」

そういつて菜乃花がドアに近づいたときだった。

「ひゃっ！」

「あらあら、大丈夫？だめじゃない、こんなところに居ちゃ」

「すみません、今から帰るので」

「同じ病棟に居るからって面会時間過ぎてるんだから」

「すぐ帰りますから!!」

「……………あ、ごめんなさいね。気をつけて」

菜乃花にしては鬼気迫る声であった。その場にいる誰もが驚きを隠せなかった。

看護師が道を空ける。菜乃花は髪を振り乱してその部屋を後にした。

……………タイヤの音を響かせながら。

「いまのつて、どういう……………」

灰は、いわゆる難聴系主人公ではなかった。そのうえ、視界を遮られ、聴覚が敏感になつている状態である。聞き逃すはずがない。

しかし、看護師はその答えを濁した

「何でもないのよ。女の子の秘密だから、聞かなかったことにしてあげて」

「はい……………」

その場ではうなずいたが、灰は食事中、ずつとそのことを考えていた。

*

それは一つの、可能性ともいえない、ただの妄想に過ぎなかった。きつと違うと、灰はそう思っていた。

だが、今までの菜乃花の行動、仕草、発言。なぜかそれらと符合する妄想が、灰の手元にはあつた。

たぶん、わからないけれど。菜乃花はきつと——

「おはよ、灰くん。今日はもう起きてるみたいだね」

上体を起こして考え事をしていた灰は、声のほうへ首を動かす。菜乃花がやってきた。だが、今日は一層元気がないように聞こえた。

「体調……悪そうだけど、大丈夫か？」

「ああ、うん。エレベーターが点検中でね。階段を登ってきたから、疲れちゃった」

えへへ、と菜乃花ははにかむ。しかし、菜乃花の元気アピールは、その困憊し切った声を隠せていない。灰の妄想への疑念は、確信へと換わりつつあつた。

「それより、灰くんの方は大丈夫？昨日はちゃんと寝られた？」

「いや、うん。まあ、大丈夫だよ」

「本当かなあ」

そう言いつつ、菜乃花はいつもの場所（椅子と机のある）に向かって歩み始める。今まで灰は気にも留めたことはなかったが、その歩みの遅さと、三つの足音に違和感を覚えた。

「なあ、菜乃花……………」

問いかけようとして思いとどまる。どう聞くのが正しいのか、どう聞けばさりげなく聞けるのか。灰には圧倒的に経験が足りなかった。

「？」

言葉が詰まり鯉のように口を開閉する灰を見て、不思議そうな顔をする菜乃花。

「あ……………のな、少し、聞きたいことがあって」

「なあに？」

言い淀んでいたが、灰は決心する。小細工なしに、素直に聞く、決意を。

「菜乃花、お前、脚が悪いのか……………？」

「確実なところから聞いていく。」

「え、え？そんなこと、ないよ？」

「唐突な質問に取り乱す菜乃花。」

「なんで隠そうとするんだ？別に脚が悪くても、菜乃花への評価は変わらない。なのに」

「ほ、ほんとうに違うんだって！ほんとうだよ……………」

カランツ

またあの音が聞こえた。松葉杖の倒れるあの音が。

「ああっ！また……」

「それ、松葉杖だろ？さつき、歩くときの足音が三つだった」

菜乃花は黙っていた。もう言い訳もできまいと、悟ったのか。

「昨日、部屋を去る時に聞こえたタイヤの音。あれは車椅子か？」

返事はない。

「正直、毎回足音も立てずに居なくなるから、不思議には思ってたんだ。なあ、なんでそんなに隠したがってるんだ？」

「先に、私から質問させてもらうね」

菜乃花は立ち上がり、灰に歩み寄る。

「私の体のことは、あの看護師に聞いたの？」

「いや、俺の勝手な想像だ。想像、だった……」

悲しげな顔を浮かべ、菜乃花にもう一度問う。

「どうして秘密にしてたんだ？」

「灰くんに、心配かけたくなくて……」

「こうやって隠されたほうが、余計心配するだろ」

「でも……………」

およそいつもの菜乃花からは想像できない弱々しい声は、灰の言葉に圧力を加える。「でも、じゃないだろ。なんだ、俺じゃ力になれないのか？俺はそんなに足手纏いか？」
「そう、だよ」

菜乃花の、先とは打って変わって力のこもった声。まさか肯定されるとは思ってもいなかった灰は、何も言えずにいた。

「灰くん、いや、誰も私を助けることなんてできないの。手を差し伸べられたって、踏ん張る脚が、手を握る力が無ければ、立ち上がることもなんてできなくなる。痛い体を無理やり支えても、体は悲鳴を上げ、やがて崩れ去る。よりひどく、より痛く、より醜く」
「な、なにを……………」

「ねえ、灰くん。これは比喻なんかじゃないんだよ。実際、私の体に起こっていること。脚力が、握力が、やがて心臓を動かす力さえも。まるで胃液が肉を溶かすように、じわじわと、筋肉が溶けていくの。そんな人間に、灰くんはいったい何ができるのかな？」
「それは、」

自分に何ができるのか？灰だけではない。いったい誰が彼女を癒すことができるだろうか。今更になって、菜乃花の凄さが理解できた。誰にも除くことができな絶望を背負う彼女は、それを抱えたまま、出会う人皆に希望を振りまいていた。そして、その

希望に最も助けられていたのは自分であったと、灰は気づいた。

菜乃花は、あくまで論すように、事実を口にする。

「何もできないでしょ？だって誰も治せないんだもん。あの、藤堂先生でさえ、治療はできないって。それに……………」

菜乃花はベッドに体重を乗せ、灰の頬に触れる。

「灰くんの目、視えてないんでしょ？」

「なんでそのことを……………」

「先週から様子おかしいもん。さすがにわかるよ、先生の言いつけ破って、目を開いちゃったんでしょ？」

菜乃花にはバレていた。もしかしたら医師もこのことは把握しているかもしれないが、それは灰にとつてどうでもいいことだ。重要なのは、自分があまりにも無力な存在だと、菜乃花に知られているということだった。

「目が視えなくなっちゃったのは、本当に、本当に残念な気持ちでいっぱい。こういうときになんて言葉にしたらいいのか、私にはわからないけど……………。でも、少なくとも灰くんは、まだ生きてる。生きていける」

涙を浮かべながら、菜乃花は灰に語り掛ける。

「生きてるってことはつまり、まだ諦めないでいられるってことなんだよ？私はもう、あ

と一か月ももたないけど……………。灰くんは諦めないで進んでいける人だって、私、知ってるから」

「なんだよ、それ」

菜乃花の言葉にそれまで何も言わなかった灰が、ようやく口を開いた。

「なあ、なんなんだよ。どうしてそんなこと言いうんだよ。どうしてそんなこと黙ってたんだよ！あと一か月!?聞いてねーよ、そんな話!!」

菜乃花と同じ世界を、彼女と並んで見たい。灰はそのために手術を受けたのだ。その結果見えなくなろうと、菜乃花さえ居れば、どんな山も越えられる。そう灰は信じていたのだ。

「ごめんね、秘密にしてて。でも灰くんが手術を受けてくれるには、こうするしか……………」

菜乃花もわかっていた。灰のきっかけになれるのは自分しかない、と。

「どうして、どうしてそこまで、自分を捨てられるんだよ……………。菜乃花がない世界なんて、なんの意味ねえよ……………」

絶望する灰に、ただ菜乃花は謝るしかなかった。

「菜乃花、頼みたいことがある。なにか……………刃物を、持ってきてくれないか?」

「え……………?」

「俺は、自分で命を絶つことにする。理解者の居ない世界なんて、生きる理由なんてない。赤の他人に世話になりながら生きてくなら、死んだほうがましだ」

灰なりの意思表示だった。どうして欲しいわけでもない。ただの、子供のわがまま。支離滅裂なまでのその主張に、菜乃花は。

「なんで、そんなこと言うの？ねえ!!」

すさまじい怒号が飛んだ。部屋中に響き渡る憤り。菜乃花は続ける。

「生きたいって言うてる人の前で、どうしてそんなこと言えるの!? どうして、どうしてわかってくれないの!! どうして私の願いを聞いてくれないの!? 私は、灰くんが好きだから、愛してるからこんなにも言うてるの!! 灰くんは昔から何も変わってない! 小学校の時も、手術前も、手術した後も!! 結局何も見えていない、視ようとしていない!! そうですよ!?! ほかの人のことが理解できないからって逃げ塞がって、人が勇気づけようとしてるのも踏みにじって!! ねえ、何とか言ったらどうなの!?! ねえ!!!」

感情が昂ぶり、松葉杖で灰を叩く。その手には力が入っていない。

「ねえ、生きてよ……………」

やがてその手にも力が入らなくなり、灰への攻撃は止んだ。

「菜乃花なんかと、最初から出会わなければ……………」

小さな声で、灰がつぶやく。おそらく、今、一番言うべきでない台詞を。

手術をしたことを後悔しているわけではない。ただ、刹那の幸せに溺れ、直後に叩き落されるのであれば、最初から虚無的な人生を送っていたほうがましであった、と。その程度の言葉であった。が、その発言は、菜乃花をもつとも傷つけることとなる。

「そ、そうだよね！ 私なんていなければよかったのね！ ごめんね、灰くん。手術受けようなんていつちやつて！ もう灰くんとは会わないって約束するから、うん………。さよなら」

「あつ、ちが、ごめん、まって!! 違うんだ！ 誤解だ!!」

鼻声で、大粒の涙をこぼしながら、彼女は言い放った。自責の念に押しつぶされそうになり、菜乃花は、彼女の体で出すべきではない速さで、その部屋を駆け出した。

灰が気づいた時には遅かった。声は届いていても、彼女はもう戻ることはないだろう。

彼女にとって長い、永い廊下を走り抜け、階段を下り……………

「あつ」

躓いた。盛大に。救いようがないくらいに。

「きゃあああああああああああつ!!!」

*

悲鳴が聞こえた。菜乃花の声だ。

「菜乃花!!?!」

とっさにベッドを飛び降りる。声が聞こえたのは部屋を出て右手だった。灰は壁伝いに進む。

「菜乃花! おい!! 菜乃花!!」

包帯が解けた。だが、かまっつてられない。菜乃花からの返事はない。

「菜乃花!! 大丈夫か!!?」

目の奥に激痛が走る。頭が割れそうなほどの痛みのなか、以前は見えなかった光がみえる。世界が黒ではなく、白く見える。光を、感じ取れる。

ああ、神様。どうか、菜乃花を助けるために、この世界を見せてください。この痛みを耐えて見せますから、どうか。

「菜乃花! 菜乃花!!」

世界が開ける。見えた。見えた、階段だ。ぼんやりとだが、階段が見えた。非常灯が見たこともない光で彩られている。

「菜乃花!!なの……………」

菜乃花がいた。階段の踊り場でうずくまっている、背中に松葉杖を生やした菜乃花を見つけた。

周辺が、紅く彩られている。菜乃花は返事もしない、ピクリとも動かない。
「う……………ああ……………」

背中の松葉杖から垂れ下がったホースのようなものが、ずるりと落ちる。

「なの……………か…?…」

階段に、雫が滴る音だけが響いていた。

あああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああつあああ

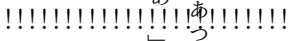
嫌だ、菜乃花が死んでしまうなんて。

消えろ。

いくら掻き出しても、映像が脳裏にちらつく。

消えろ。

母親の姿と菜乃花が重なる。



消えろ。

菜乃花のこと、昔のこと、赤色。

消えろ。

もっと、ふかくまで。

消えろ。

えろ。消え

ろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。

消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。

えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。

ろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。

えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。

ろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。

えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。

ろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。

ろ。消えろ。消

*

*

*

「脳の損傷、出血性ショック、アドレナリン脳内麻薬の異常分泌」

レポートをまとめ、ため息を吐く。

「録音記録によると切除したはずの記憶のフラッシュバックの兆候も見られました」

追加事項を書いていく。

「強いトラウマは表層の記憶除去では完全に切り除けない、トリガーを認識できなくすれば改善可能、と」

ペンを放り投げ、天井を仰ぐ。

「さーあ、貴重な検体を消費して新規情報はこれだけか」

席を立ち、診察室の奥へと足を運ぶ。白くくぐもっているカプセルの中に、藤堂は話しかける。

「もう少し、もう少し待っていてくれるかな」

返事は、なかった。